

斯の如き取締を勵行せずとも、通貨を取締つて一圓の紙幣が三圓も四圓もする様に紙幣の價値を高めたなら、物價は自然に低落するであらう、之れ眞に除き難き猫を除かんとする愚の處置であつて、夫よりか先づ猫の好物なる鯉節の始末をなすべしとの持論を僕は有つて居る。即ち多くの國民を相手とするよりか、一日本銀行をして通貨を引締らす方が安全で且有利ではあるまいか。見給へ九億何千萬圓と云ふ鯉節が、日本全國に臭ひ渡つて居るぢやないか。

此の法令が善く實行せられるか如何かは不明だが、萬一之を勵行するとなれば、物價は著しい低落をするであらう、低落した物價は善いとしても、折角日本も富國強兵の仲間入をして工業は勃興し、輸出超過の好況を呈し、經濟界は順潮に赴いたが、今度は反對に總ての事業が蹉跌し經濟界は萎微衰退して、遂に政府怨嗟の聲を放つ様になると僕は確信して居る。

さうなると今でも民心の離反せんとする寺内内閣が、此盲舉を敢てし正に自己の政治的生命を短縮するものだ。僕は國家の秩序を誤らんとする者は成金に非ずして、今度の政に痛嘆の極である。

▲と、痛快なる其議論、適切なる其意見、眞に人をして溜飲を下げしむるものがあるではないか。今更こと新しく紹介するまでもなく、矢野君は中央に於ける土佐出身の實業家として、鐵中の錚々たるもので、其見識といひ其經驗といひ、世の凡庸の徒と選を異にせるは土を識る人の均しく推稱して措かざる所である。彼の土佐銀行問題の如き畢竟愛山先生の諷刺ではないが、本町の溝へ鯛を放つたやうなもので、鱧が石垣に觸れたり腹が底へ附いたり、つまり君が自由手腕を揮ふのに天地が狭過ぎた結果に外ないのであつたが、今では矢野君もいよく大海へ乗出したから、是からが君の活動の舞臺だ、記者は必ずや此製織會社が君の經營により其名の如く百花爛熳の春を迎ふるに至らんことを期待して疑はないのである。君乞ふ自愛せよ。(府下千駄谷八四二、電話番号町三五九〇)

時事新報記者 安岡秀夫

▲土佐人にして東京の操觚社會に在る者は可なり多いが、就中記者の平生最も敬意を表してをるのは中島嶺(國民新聞)原成吉(都新聞)安岡秀夫(時事新報)の三人である。中島氏の奇骨稜々として古武士の風概あることは今更説明しなくとも能く人の知る所であるが、人格者としての原氏と論壇の雄としての安岡君は縣地の人に多くの親しみが無いから、茲には先づ安岡君を紹介する。

▲相門相を出す、安岡君の令兄は彼の有名なる雄吉氏で、而して其義父に是も曾て後藤伯の股肱として政界に鳴らした甲藤大器氏があるといふにつけても、一門の空氣自ら君を導いて今日の地位に至らしめた事を知らるゝのである。君は明治六年呱呱の聲を幡多中村に擧げ、暫らく一中に學んだ後、明治廿二年上京して三田の塾に入り、廿六年卒業すると同時に直ちに身を操觚界に投じ、爾來二十有餘年一日の如く時事新報社の論壇に立ちて堂々筆陣を張り、其間支那に遊び南米地方に航したること杯もあつて今は都下一流の新聞

記者として識者の間に重きを置かれてをる。

▲同じ中村の出身でも君は彼の幸徳秋水などの如き矯激者流とは全く選を異にし、身を持すること頗る端正、しかも其世態人情を觀察し批判するに當つて常に中庸公平の眼を脱せ



ず。その諄々として説き媿々として論ずる所、よし絢爛花の如き光彩なしとするも、穩健着實、人をして向ふ所を誤らしめざる點に於て君の悔るべからざる筆力を認めらるゝものがある。夫の時事新報が所謂日本一大新聞として其聲價を保つ所以のものまだ君の努力に俟つ所尠からずとせねばならぬ。

▲『僕は君などの訪問を受ける資格はないが、折角足を運ばれたのだからホンの責塞ぎに土佐から出て長く時事新報に居るといふ立場から僕の新聞記者觀をお話しよう』との前提の下に、君は往訪の記者に對して次の如く語られた。

一體新聞記者といふ者は如何いふ地位にあるか、僕自身すら判らない、世間では是を頗

る名譽の職業の様に考へてをる人もあるが、又一方では記者自身が頗る不名譽な職業であるかの如く感じる事もある。西洋ではジャーナリストといへば可なり社會から尊敬されて居るが、日本では必ずしも左様でない。勿論日本の新聞記者が西洋のそれに比し知識、才能、人格等が劣つてをる點もあらうし、又是を天職とする丈の信念がない點もあり、尙ほ新聞記者が往々惡徳行爲をすることも一の原因で、是等の點に大いに自覺して自己の權威を保つ事に注意しなければならぬ。

併し一方から言ふと世間の人未だ十分新聞の價値といふものを認めない。即ち新聞を以て寄席や活動と一般、娛樂機關の如く考へ、是が社會必須の機關であるといふ價値を認めないのも新聞記者を重要視しない一原因だらうと思はるゝ。而して將來新聞社會に身を投ぜんとする人は是を自分の天職であると確信して始めるなら良いが、單に實利的の考へて、即ち物質上何等か獲ようとする目的から新聞記者になりたいといふ者があるなら、僕は切に之を止めさせたいのである。

と、然り、どんな階級にもピンからキリまであるから、天稟の才能と相當の蘊蓄がなくて

新聞記者になるのは大間違であるが、既に修養堂に入つて大新聞の論壇に立ち、自ら天下の耳目たることを任ずる安岡君其人の如き進境に達せば眞に無冠の宰相として十二分の敬意を表せねばならぬ。吾人は人格あり學識あるジャーナリストとして茲に安岡君の名譽を表彰せんとするのである。(本郷區西片町十への一六、電話小石川二〇一五)

石炭商 松本三郎

▲築地明石町の海岸、月島を前に望んだ隅田川の河口、帆檣林立せる形勝の地に宏莊なる一廓を構へ、建並びたる三棟の倉庫の黒壁に石炭商と朱色に現はし、一見その商賣の華々しさを思はしむるものは、誰あらう我が松本三郎君である。

▲歐洲戰亂の好影響を受けて一躍身代を殖やしたものは船に鐵に乃至染料に藥品に數へ來らば一々枚舉に違ないが、石炭も亦其一つで、何しろ戰前噸四十圓内外のものが今では倍になつてをるから、坐つて居ても唯だ儲けるのを、況して神出鬼没、縱横に其敏腕を揮つ

た松本君の懐中が肥らぬ筈はない。

▲されど松本君は決して一夜造りの成金でない。石炭商としては従来東京でも五本の指に數へらるゝ位の有力な地位を占め、築地の本店の外、各所に支店を有し、専ら茨城無煙炭を取扱ひ、なかゝ手廣く商賣をしてをつたから、ヨシ戦争といふ好運がなくとも、君



の地歩は漸次に發展すべき運命を有つて居た。況して戦争といふ好機會に乗じたものだから、恰も龍に翼が生えた如く、松本君は一躍して斯業界の巨人となつたのである。

▲松本君は安藝郡羽根村の産である。元來安藝は三菱家の發祥した土地だけあつて、實業家に政治家に軍人に學者文學家に其他人物が輩出してゐるが、殊に羽根からは現横濱市長たる安藤謙介が出て、縣下政界の策士たる檜垣正義が出て、阪神の實業界に錚々たる名ある山地土佐太郎、川崎善助、京都市助役たる鷺野法學士などが出た土地柄で、松本君も是に劣らずしかも土地の名産たる木炭にゆかりある此文明

の燃料に依つて成功したるも奇しき因縁である。

▲君は生來商機に通じ、青年の頃薪炭業に手を出して土佐と大阪との間を往來して居たが日清戦争の酣なる明治廿八年の一月一日といふ吉日を卜し、君は斷然志を決して東京に上り、當時竹内綱氏が富士の御料林を拂下げ製材事業をした居たのに關係する事となつたけれど、其事業の面白からざるに其所を去つて、同じく竹内氏の經營する石炭を販賣せる柏組に入り、暫らく經驗を積みし後、明治三十一年獨立して店を開き、終に今日の地歩を造るに至つた。

▲爾來二十年間奮闘の効空しからず、前にも云へる如く今日に於て東都石炭商の泰斗たる地位を占むるに至つたが、今日松本商店の取扱に係る石炭は北海道、常磐の方向より西は九州に及び、主として塊炭を賣買し、一ヶ年の取引高百萬圓に達するといふを聞くにつけて、如何に其事業の旺盛なるかを卜するに足るのである。

▲而して君は其石炭業に成功せる餘力を以て、近年は鑛山業に手を延ばして潑刺たる活躍を試みてをる。而して君が目下専ら力を注げるは輝水鉛であるが、今更説明する迄もなく

輝水鉛は武器の製造に必要なモリブデン鋼の原料たるもので、彼の獨逸の大砲が恐るべき威力あるは其砲身に此のモリブデン鋼を用ふるが爲なりと稱せらるゝ位に有用なる鑛物である、此輝水鉛の研究に着目したのは醫學博士岸一太氏で、氏は之が爲に刀圭界を去り今回府下赤羽に十萬坪の敷地を求め目下工場の建築に着手してをるが、其事業の支配人となり即ち岸博士の片腕となつてをるのは松本君である。昨今博士が飛行機研究のため巨資を投じて大規模の計畫を立てゝをると世間に噂さるゝは畢竟この輝水鉛に關する起業を誤まつて傳へたるもので、輒ち博士は此工場落成を待つて製鋼業を興し我國の軍器製造に貢獻せんとする決心である。聞く所によれば其所有に係る越後西頸城郡小瀧村及び富山縣中新川郡小黒部の輝水鉛鑛は其質に於て其量に於て共に世界有數のものなりといふ。

▲尙ほ君は富山縣立山水力電氣株式會社(資本金百萬圓)の取締役ともなり、縦横に活動してをるが、斯る忙中にありながら、綽々たる閑月日を有し、即ち君は幼少の時より圍碁の技に長じ、東京に來りては先代本因坊秀榮氏に就き腕を磨きて頗る造詣する所あり。又た圍球、檯棋、聯珠等にも長じ、殊に聯珠に至つては斯道の達人たる黒岩周六氏の先輩格で

あつたが、一朝豁然として悟る所あり、斯る勝負事に手を出すことは一切之を廢し、今日では、謠曲を唯一の樂しみとし、是また黒人の壘を摩する迄の境に達し、輒ち其肝腎の商業に於けるは元より、如何なる技藝にも才氣煥發して成功せざるなき眞に人をして驚嘆せしむるものがある、尙ほ且つ君は讀書の趣味を有し、試みに君の書齋に入れば和漢の新著述書架にうづ高く、漫ろに其人格の床しさを偲ぶべきものがある。

▲要するに君は新時代の新商人として成功すべき素質を有し、また成功せざるべからざる徑路を辿りつゝある人である。語に曰く天は自から助くる者を助くと、本年四十七歳の君の前途には尙ほ幾多の光明輝けること獨り記者の言のみでない。(京橋區築地明石町明石河岸、電話京橋一八九一)

大阪商船會社
東京支店長

深尾隆太郎

▲資本金五千萬圓、所有汽船百十一隻(此噸數二十一萬八千噸)關西に於ける樞要の航路を

占むるは元より、北米に南米に孟買に臺灣に香港、廣東に大連に浦鹽、濠洲、朝鮮に大は九五一九噸のマニラ丸より小は一一三噸の第二花咲丸に至るまで縦横に航路を開拓し、東半球の海上に覇を稱ふる大阪商船會社は日本郵船と共と海運界の二大王國である。

▲九十九洋浪高く、漣の滋賀丸や琉球丸の航海に土佐も亦た大阪商船とは離るべからざる

親みがあるが、此親類會社の東京支店を主宰せるは我が深尾隆太郎君である。



▲大阪商船の支店は海の内外に互りて幾十を數ふべきであるが、此大會社を代表して時に政府と折衝し、時に同業者の交渉の局に當る上に於て東京支店が最も重要な地位を占めてをることは今更言ふ迄もない。即ち東京支店長の椅子は大阪商船の全權大使たる格に相當するものである。斯る重大なる責任あると共に名譽ある椅子に在りて外交上の手腕を發揮せる深尾君その人の風概以て想望すべきである。

▲相門相を出すの語、眞に人を欺かず。君は佐川深尾家の一族である。思ふ昔慶長六年山内一豊公が土佐に入國すると共に、深尾和泉守重良も遠州掛川より移り來り佐川に采邑一萬石を賜ひて國老に封せられてより、爾來二百六十有餘年、代々意を文物の振興に用ひたるがため碩學鴻儒頻りに輩出し、殊に明治維新に際しては田中青山伯を始めとし勤王の志士相續いて出て眞に光彩の燦然たるものがあつた。しかも人は武士花は櫻の名所たる霧生關に、碧潭藍の如き柳瀬川に山光水色の美と相待つて、佐川が土佐の小京都を以て稱せられ、今尙ほ人物の淵藪たること決して偶然ならずとすべきである。而して君は幕末の際容堂公と共に京都に活躍し、夙に名國老の譽高かりし鼎氏の令孫で、田中青山伯の令夫人は實に君の伯母である。

▲此の名門の血を承けたる君の經歷如何。記者の強て訊ぬるまゝに君は語つて曰く、僕は土佐には比較的縁の薄い方だ、明治十年大阪で生れ、學校も其地ですまし、明治廿七年頃一ツ橋の高等商業に入り、在學中田中伯の家に厄介になつた事もある。學校を出ると直ちに大阪商船に入り運輸課の勤務となり、各地の支店詰ともなつたが重に本社に

居た。

日露戦役後鎮南浦の支店長として赴任し、翌三十九年大連支店長に轉じ、四十二年米國に渡航し、翌年歸朝すると共に近海課長を命ぜられ、日鮮滿露連絡會議の露都に開かる際は、會社を代表してペトログラードに出張し、次で倫敦に遊び、近く東京支店の設置するに及んで派遣された次第です。

と、この談片に徴するも、君が如何に大阪商船に於て重要な人物なるかを知らるゝのである。

▲鐵橋の畔、車馬織るが如き支店の樓上に君は記者を迎へ、諄々として語る。曰く、土佐には論客が多く、隨つてなかく立派な議論を口にするが、他國の人は是をドウ解釋してをるか、僕が米國に居る時或人から「君は何處だ」と聞かれたから「土佐だ」と答へると、其男は「ハ、氣狂ひの本場だなあ」と言つたことがあつたが、是は畢竟土佐人が感情的の性格を備へてをるからの見解だらう。此感情的人物の多いのは土佐人の長所で、また一方より見れば缺點であると言つても良い。

土佐も明治の中年頃までは先輩の跡を履んで政治問題に嘴を容れる人が多かつたが、此頃實業の方面に人心が向いて來たのは善い現象だと信じます。僕は前にも言つた通り土佐には縁が薄いが、併し土佐が一番慕はしいのです。

と、越鳥南枝を忘れず、其志を郷國に存する君の志以て多とすべきである。今や土佐でも名門の後は概して萎微振はざる時に際し、たゞ君が將來有爲の資を以て活動の舞臺に立ち、人をして前途の大成を想望せしむるものは、獨り深尾家のために祝すべきのみならず、土佐人としても亦た君に多大の囑望を有するものである。君乞ふ自愛せよ。(四谷區鹽町三の四三、電話番号町一〇六六)

獨逸法學博士 後藤 六 彌

▲象二郎を父とし、猛太郎を兄とせる後藤六彌君は其の學識から云つても、其經歷から云つてもロク／＼たる一貴公子でない。乃ち土佐人の血を引ける一種出色の人物として紹

介する價値ありとせねばならぬ。

▲六彌君は土佐に縁故の少い方で、随つて其經歷を知るものは少いだらう。君自身に語る處を聞くに、少年の頃は父君が高島炭山を經營する關係から長崎に數年の月日を送り



十八歳の時東京府尋常中學校に移り、傍ら嘉納塾で柔道の稽古を積み、第三第一高等學校に學びし後、明治廿九年獨逸に遊んで伯林大學に入り、博士の稱號を得て歸朝したのが三十五年であつた。

▲いよく社會の實生活に入ることゝなつた處で、修養を積み且つ自信の強い君は親類や故舊の庇護に浴することを屑しとせず、自己の手腕に依りて運命を開拓せんと欲し、井上角五郎氏の斡旋によりて北海道炭礦鐵道會社に入り、數年間其の手腕を發揮したが、鐵道國有の行はるゝと共に依然舊會社に残り日本製鋼所に兼勤し、依然井上氏の片腕として活動したものであつた。

▲四十四年福澤桃介氏が倫敦ドッドウエル商會の東京支店を引受けることになつたけれども、これは多忙の福澤氏には不可能のため君が代りて其支店長となり、主として奧太利や獨逸より器械の輸入をやつて居たが、開戦と同時に支店を閉鎖し、今は深川に組合でバルブ製造工場を設け、其經營に任ずる傍ら某私立學校の講師を擔任するといふのが輒ち君の經歷の一斑である。

▲「斯ふいふ風で事業らしい事は出來ず、相變らずの素寒貧だ。人生五十年とすればモウ六年しかないが、逆も其間に震天動地の仕事も出來さうにもない。僕は今妻と二人きりて、母は中風で大森に靜養して居るが、何しろ兄が彼の様な始末で數多の小供を残して逝いたから、僕の責任もなかく、重いよ」と、君の談片を耳にするにつけても、名家の後が振はな

いのは同情に堪へないが、さりとて君は父君を其儘、豪宕磊落の質で、加かも獨逸仕込で社交術に長じ、其上豊富なる學識を具へてゐるから、君の將來は決して所謂愚兄と其揆を一にすることなく、必らずや飛躍一番、先代の胤たるに愧ざる底の活動を見ることを疑はないのである。

▲殊に君に採るべきは権門富豪の後援を頼らざることである。若し君にして蒼蠅驥に附し蘿蔦松に依る姑息の考へがあつたら、どんな立身出世も出来てをるが、財閥門閥ともに其餘澤を僥倖せず、飽く迄も自己の腕に依りて奮闘せんとする其の意氣は大に買つてやらねばならぬ。腐つても鯛は鯛だが、況して君は後藤伯爵家の生氣潑刺たる活きた鯛である。記者は刮目して君が今後の活躍を見んと欲するのである。(麻布區富士見町二九、電話芝四七〇九)

理學博士
東京帝國大學教授
寺田寅彦

▲『寺田先生のラウエ映畫の實驗方法及び其説明に關する研究といふのは、獨逸ミュンヘン大學の教授なるラウエ博士が始めてレントシエン線(X線)を物體の結晶に當てるとレントシエン線の干涉によつて其結晶特有の模様が出るといふ現象を發見したのであるが、寺田先生は其實驗の方法や其説明に關して研究された、是に依つてレントシエン線の波及と分

子の構造が判ることになるのです』とは本年八月一日寺田博士が帝國學士院の恩賜賞を授與するにつき、同じく學士院賞を授與された西川理學博士が新聞記者に向つて説明した一節である。

▲斯ふ説明されても門外漢の吾々には十分理解が出来ぬが、何しろ本縣人にして始めて此榮譽ある恩賜に浴したことを思はゞ、寺田博士の研究に對しては多大の敬意を表せざるを得ないのである。



▲言ふ迄もなく帝國學士院の恩賜賞は軍人の金鷄勳章——功一級のそれ——で學者としての名譽無上と稱すべきである。元來土佐は政論の發達した所で、理窟は誰でも二人前も三人前も能くこねるが、悲しい哉、シンミリと勉強して學者となる人物が乏しい。此間に獨り寺田博士あるはまさに空谷に梵音を聞くの思ひなくんばあらずである。

▲博士自身の語る所によると、嚴父は陸軍一等主計正として知られたる寺田利正氏であつ

て、明治十一年東京で生れ、幼少の頃嚴父の任所に伴はれて名古屋、東京などで暮したが小學校は江ノ口を濟まし、夫から一中を経て熊本高等學校を卒業し、次で三十六年東京帝大を出たが、尙ほも研究を續くるため理科大學講師たる傍、大學院に入り四十一年に之を卒業、齡僅かに三十二歳にして博士の稱號を授けられ、次で四十二年獨逸に留學を命ぜられ二年間の研究を終へて歸朝すると共に、大學教授に任ぜられ今日に至つた、といふのが輒ち君の經歷の梗概である。

▲而して君は單純な學究でなく、生來文學上に多大の趣味を持ち、夙に故夏目漱石氏の門に入り、氏の指導に依つて創作を發表したるもの尠からずといふに至つて君の性格の一斑を窺はるゝのである。

▲一體日本では——殊に土佐では政治家や軍人などに重きを置き、其行動や功勳は新聞紙上でも盛んに書立てるが、比較的まだ學者に對して敬意を表することが足りないやうに思はるゝ風がある。而かも近代の文明は其淵源を學術に發し、殊に今回の大戦役の如き全く科學の戦争であると稱せられ居る位だから、今後大に學者を待遇するの氣風を養ふことに

しなればならない。

▲寺田博士は此夏歸省して、その有益な談話は高知新聞紙上に精しく紹介したから、之を省略して、茲には君の學者たる尊崇すべき地位に對して敬意を表することに止むる。(本郷區彌生町二はの二六)

土木請負業 阪本和吉

▲阪本和吉君の名は彼の高松に於ける瀆職事件によりて始めて世の注目を惹いた。時は増師問題の第三十七議會に洶湧たる波瀾を捲いた際、代議士以外白面の一實業家を以て、大浦農相、林田翰長等の間に縦横に立廻り、神出鬼没、その運動の機敏巧妙なる人をして端倪せしむる能はざるものがあつた。而して之と共に政界の一角には一の疑問を起せり。曰く阪本和吉とは果して何者かと。

▲若し這般の行動を以て君の風概を想望せば、君を以て政界の策士と做すも敢て怪しむに

足らぬが、君の志は素と政界にあらず、否な君が同郡の友人には楠目玄、森田茂、水野吉太郎だのといふ連中があつたから、朱に交れば赤くなり、根から政治が嫌ひでもなかつたが、君は恒産なくして徒らに選舉などの提灯持をなし、所謂政治屋になるのは詰らないと夙に身を實業界に投じ、しかも内地の跼踏たる天地に蝸牛角上の争ひをなすを以て、男子の業にあらずとなし、遠く大陸に乘出し滿洲を舞臺として活躍を試みたのである。

▲君が滿洲に行つたのは今から十數年の前であつた。先是君は明治五年を以て呱呱の聲を物部川の東なる香美郡佐古村逆川といふ山奥の間に擧げ、小學校卒業後久しく村の鼻垂坊主を相手に教師をしてゐたが、其後東京に上つて明大を卒業し、一旦は高等文官を以て身を立んとしたけれど、見事試験に落第したので、茲に於て大に發奮し、心機を一轉して遠く滿洲に渡航したのである。若し當時君にして文官試験に及第して居たら、今では地方の事務官位が關の山で、此頃の物價騰貴にはキユウ〜いつて居るだらうが、實に人間の運命の成行は神ならぬ身の豫想の出來ないものである。

▲君が滿洲渡航の動機は白川洋行に入つたからのことであつた。白川洋行は彼の有名なる元の香川縣代議士白川友一氏の經營するものであつて、君は深く白川氏の信任を受け、明治三十九年より昨年まで其支配人として南滿鐵道及び朝鮮總督府の土木工事を請負ひ、鐵道は元より築港に橋梁に運河に貯水池に驚くべき手腕を發揮したので、白川洋行の名と共に君の名は滿洲到る處に喧傳されたものである。



▲瀆職事件の起るを機として、君は昨年一月獨立して土木請負業を開始し、傍ら鑛山の經營をなし、今日に於ては本店を東京に置き、請負業のため朝鮮龍山、伊豫長濱、群馬太田に、また鑛山業のため佐渡眞野に各事務所を設けて目下潑刺たる行動を試み、現に愛媛鐵道、阪東鐵道の工事を請負うて工事施行中に屬し、又別に朝鮮の水利事業を企畫して着々

工事を進めつゝあるのである。

▲就中記すべきは其朝鮮の水利事業である。由來朝鮮に於ける農業の大に振興すべくして而かも田野今に於て尙ほ荒廢の状態にあるは、畢竟灌溉の便を得ざるが爲なるを以て、

君は夙に茲に見る所あり、先づ第一着として全羅道金化郡に於ける六千六百町の水利工事を始あ、而して其成功したる水田は地主と折半する契約を以て、六十萬圓の資金を投じ目下盛んに工事中であるが、其全部成功の曉は君の所得に歸すべき土地の價格は百六十五萬圓に上り、其小作料の所得一ヶ年二十萬圓を下らずといふに至つては如何に其有利なる事業なるかを知るに足るのである。尙ほ君は此外に土木請負を目的とする南海合資會社（資本金二十五萬圓）を設立して其業務擔當社員となり、又東京消毒株式會社の社長の椅子にもある。

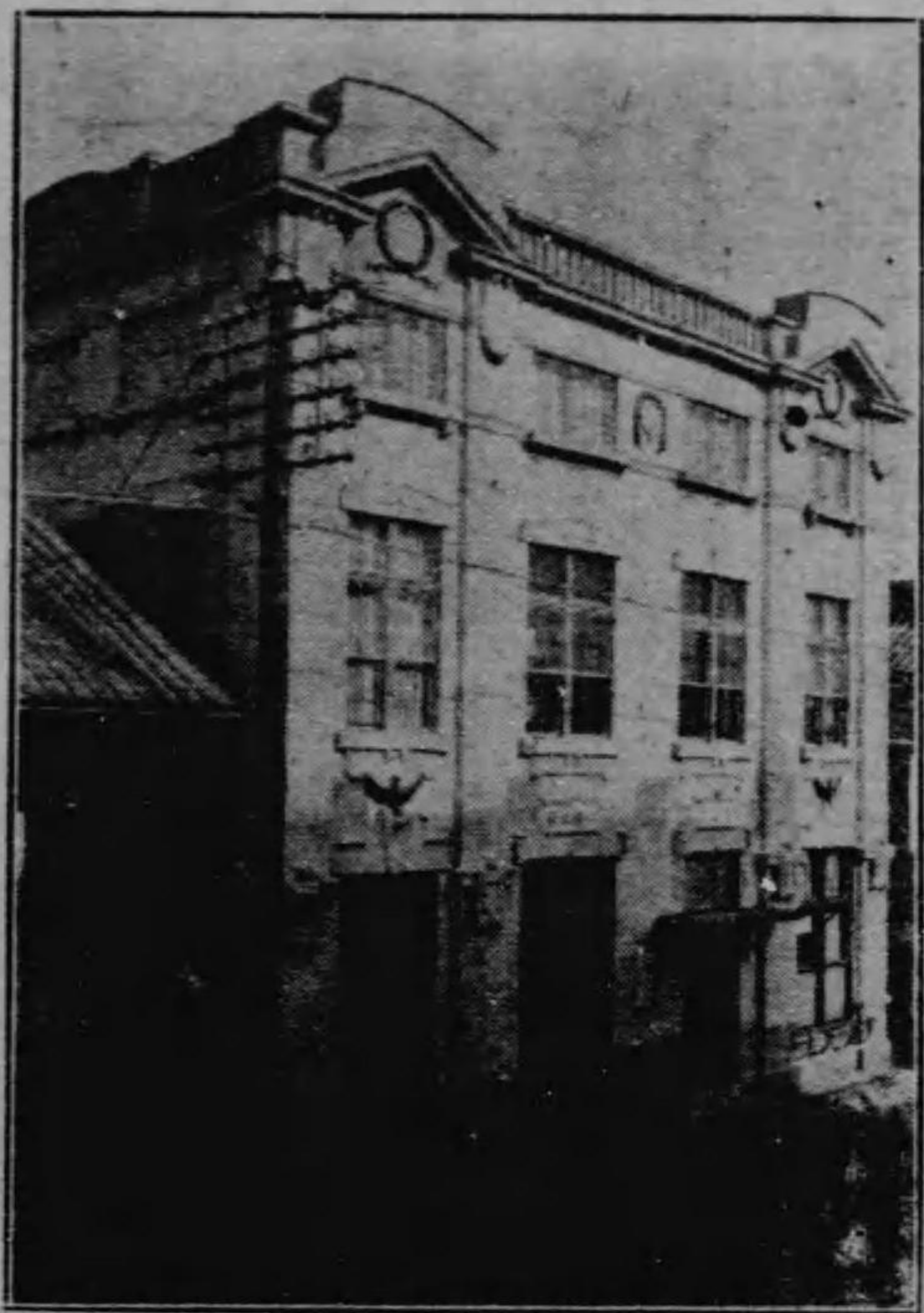
▲斯の如くにして君は今多大の希望を以て活動を試みつゝある。思ふに君が多年斯業に従事したる経験と、其遠大なる抱負とは遠からず一大成功の域に達し、彼の馬關に於ける間猛馬氏と共に本縣出身の二大請負業者として併稱さるゝに至るであらう。君は其狀貌に現はるゝが如く、個儻不羈、奇骨俠骨共に備へ、しかも土木請負業といへば多くは親分上りの文盲漢を常とせるに引代へ、君の學識と人格とは斯道界に於て嶄然一頭地を抜けるものがある。好漢乞ふ自愛せよ。（牛込區新小川町三の三〇、番話番町五三二一〇）

富山房社長 阪本嘉治馬

▲曰く文章は經國の大業にして不朽の盛事なりと。然り、然れども文章に伴ふに鉛槧の業を以てせざれば、开は畢竟雨なき龍、モーターなきエンジンであつて、百世の下汗青を照すことは到底不可能である。宜なる哉、近代文藝の復興が印刷器械の發明に負へることや。▲出版業が文化の發達に密接の關係あることは今更言ふ迄もない。然るに方今書肆の多きその神聖なる本分を忘れ、徒に輕佻浮薄なる人情、風潮に媚びて頻々如何はしき際物的の刊行を試み、或は焼直し物を盛んに振廻し、斯くて羊頭を掲げて狗肉を賣らんとする者の輩出する傾向あるは、讀書界の爲に頗る憂ふべき現象と言はねばならぬ。

▲斯る時代の風潮の中にありて、其精神常に社會の公益と一致することを忘れず、永久的著作の爲に多大の費用と勞力とを費して毫も吝む所なく、斯くて學術的書肆としての權威を維持することに怠らざる、我が富山房の如きあるは天下讀書子の大に意を強ふする所である。

▲創業三十年、發行圖書三千部、富山房は如何に學界の爲に貢獻をなしたるものぞ。試みに其二三を擧げんに、先づ學術圖書としては三好博士の「最新植物學講義」、瀨川博士の「西



富山房

洋全史」、大幸博士の「物理化學」を始め、井上博士の「日本朱子派の哲學」「日本陽明學派の哲學」、日本古學派の哲學、石川博士の「大動物學」、長岡博士の「ローレンツ物理學」、中川博士の「平面解析幾何學」、田中館博士の「航空機講話」、溝淵學士の「教育學講義」等あり。是等は孰れも著者と發行者たる富山房とが十年若くは數年の努力と鉅萬の財力とを費やせる明治時代の代表的出版物であつて、區々たる眼前の營利を目的とせる書肆の到底企及すべからざる業である。

▲その他芳賀博士の「國民性十講」、坪内博士の「沙翁全集」、森博士の「ファウスム」、木村鷹太郎氏の「プラトーン全集」、大町桂月氏の「伯爵後藤象二郎」芳賀博士杉谷代水氏合著「作文講話及文範」、書翰文講話及文範」に重野、天野、寺尾、兩上田、坪井、服部、萩野、横山、中島中村、桑木、織田、岡田、小川、遠藤諸博士其他當代一流の學者文士専門家を網羅せる幾多の著述に、洛陽の紙價を高からしめたるもの一にして足らず。更に辭書類にては彼の有名な吉田東伍博士の「大日本地名辭書」を始めとし「日本家庭百科事彙」あり「大日本國語辭典」あり、「國民百科辭典」あり「詳解漢和大辭典」あり、「佛教大辭彙」あり、これ又學術界に於て他に匹儔を求むべからざる不朽の産物たるを失はないのである。

▲更に叢書類に教科圖書に地圖に續々名著を世に紹介して明治大正の文化に富山房が多大の寄與をなしたることは一々俚指するに違あらざる所である。世人は常に著作者の苦心のみを傳へて發行者のそれに及ばざるも、戦勝の光榮が攻城野戰の將士に次いで兵站部隊にも分たるゝが如く、著作界の資源たる書肆の功勞も共に之を認めねばならぬ。

▲殊に記すべきは富山房が大隈侯年來の理想たる國民教育向上の大精神を體して雑誌「新

日本」を發刊し、又大町桂月氏を主筆とせる「學生」に天下の青年を指導誘掖し、且「史學雜誌」(東京帝大文科大學編輯)を發行する等、書肆としての富山房の地位は量に於てこそ博文館に及ばざれ、其實質に於ては遙に彼を凌駕するものがある。

▲浩瀚なる「土佐維新勤王史」の刊行は田中青山伯の後援に待つ所多きも、富山房の努力また縣民の感謝に値する所である。吾人は茲に於て阪本嘉治馬君その人の出所進退に就て一瞥する所がなくてはならぬ。

▲瓜の蔓に茄子は生らぬ、吾人は富山房今日の盛事を見るに附け、其前身たる東洋館の過ぎし昔を回顧せざるを得ない。

▲「暖かならんと欲し猶ほ寒く節序遅し、朝々指を屈して花期を數ふ、花期未だ到らず意先づ到る、爲に賦す墨江春色の詩」にも知らるゝ一代の先覺者たりし小野梓氏が餘業として經營したる書肆東洋館は實に阪本君の搖籃であつた。君は如何にして小野氏に私淑せしものぞ、記者の質問に對し君は三十年前の往事を追憶して感慨に堪へざるものゝ如く語つて曰く、

家は貧乏で仕方なく郷里の宿毛を飛出し東京へ來たのは十五六の時であつた。其頃小野先生は政論界に立つ傍、自から書肆を開いて彼の有名な國憲汎論などを發行して名聲噴々たるものであつたから、自分は先生の人物に傾倒し酒井融氏の斡旋で、東洋館の小僧に這入つたものだが元來先生の主義は「凡そ國民教育は學校其他の機關に待つべき事は勿論であるが、夫れと共に多くの圖書を發行し國民の讀書熱を高めて内外新舊の知識の發達普及に力めねばならぬ。是に就ては出版業を發達せしめねばならぬが、今日の様な營利的の出版業者のみでは到底遠大なる國家的大事業は遂行されない。是非共世を益し人を利する完全なる出版をせねばならぬ」といふのであつて、この東洋館の營業方針は、また今日富山房の主義である。自分が及ばずながら三十年一日の如く出版界の爲めに努力し來つるのも畢竟先生の教に基いたものである。

士族の商法に間もなく東洋館は閉店の止むなきに至り、小野先生はまた不幸にして病歿されたので、自分は如何にもして先生の遺志を繼いで起たんものと、先生の義兄義眞翁に請うて三百圓の出資を仰ぎ、十九年の三月に現在の神田裏神保町に一ヶ月二圓の家を

借り再び店を開いたのが、抑富山房の濫觴です。

▲白扇倒まに東海に懸る芙蓉の峰の如く今日出版界に雄飛せる富山房も、其昔に遡れば、斯の如き歴史をたどつたものである。而かも阪本君其人の高遠なる理想と、その堅實なる營業方針とは他の同業者とは全く選を異にし、決して一夜造りのものや焼直し物などに手を着くことなく、知名の學者と交渉し之を助けて、名著の刊行に努め、國を益し人を利すると共に、また自家の營業を發展せしめ終に今日の大をなすに至つたのである。

▲富山房は今表面合資組織になつて公稱出資額十萬圓であるが、阪本君個人の富はモウ幾十萬圓に達してをるだらう。君はまだ本年五十二歳の男盛だといふから、是からが花だ。知らず阪本君たるもの其出版業に成功したる手腕を以て今後果して如何なる方面にか新天地を開拓せんとするものぞ。乞ふ刮目して之を見ん。(住宅小石川區林町七〇、電話小石川二七五)

崎村商會主 崎村猪久馬

▲三井家の畠から出て、目下本芝に獨力を以て機械販賣業を經營せる奮闘家に崎村猪久馬といふ新進の實業家がある。今日は一ツ同君を茲に紹介する。

▲崎村君は明治四年九反田に生れたる人で、青年時代より奇才縦横、辯論また他の儕輩を抜き、即ち天稟の才人であつた。既に才人である、中學校を卒業して一たび第三高等學校に入つたものゝ、學科の勉強などはソチのけて、當時高潮に達した政論に共鳴して、鬱勃たる壯心禁する能はず、中途にして學校を飛出し、二十五年に東京へ出て身を操觚界に投じ政論の鼓吹に努めたものである。

▲君が最初文壇に立つたのは東京新聞であつた。當時同新聞には坂崎紫瀾などの先輩株が居たが、君は生來文筆の才に長じ、政治經濟等の硬派記者に適すると共に、艶麗なる軟派文學にも獨特の才筆を有して居たので、崎村君の名は一時東都の文壇に重きを置かれたものであつた。

▲君は新聞記者生活を續くこと前後八年に及んだ。其後外人イーピアソンの經營に係るボックス、オヴ、キユーリユース社の支配人となり、傍ら北澤樂天等と共に實業の雜誌を發行したこともあるが、君は多年の經驗上操觚界の永く身を置く所にあらずと達觀し、茲に心機一轉して、兼て知遇を受くる太田黒重五郎氏の斡旋により筆を捨て、牙籌を採り、

崎村猪久馬

明治三十四年三井物産會社に入ることとなつた。是が抑も君が實業家として運命の開拓する其第一歩であつた。

▲其後三十七年に至り太田黒氏の經營せる芝浦製作所が三井の手を離れ獨立して株式會社となるに及び、君は太田黒氏の懇請もだし難く芝浦に入り同氏の片腕となつて、目覺せしき活動を試み、こゝに經驗を積むと共にまた信用の基礎を築いたのである。

▲君は往訪の記者に語つて曰く

當時芝浦には土佐人が非常に少く、今江ノ口町に居る大八木喬梁氏が工學士として在勤

する許りて、土佐の者は僕と二人きりであつた。其後僕は約七人の土佐人を世話して此處に入れたが、何れも失敗して辭職し、殆んど成功する者はなかつた。たゞ其後暫くして這入つて來た人で、今の山本忠興博士が成功したゞけである。元來三井と云ふ處には土佐人が少く、それに元老連の出身關係よりして自然學閥的氣風があつて、物産部には高等商業出身者多く、銀行部には慶應の出身者多く、鑛山部には帝大の方が多いと云つた様に、夫々違つて居る。

彼の太田黒氏は、芝浦をアレ迄にした丈あつて人を見るにも使ふにも仲々巧妙な處があつた。僕共は随分信用せられて居たので、自分自身が恐ろしくなつて無責任な事は如何にしても出来ない様になつて居たのである。

然るに其後太田黒氏が同社を辭職する事となつたので、僕共も四十何人が一緒に退いて了つた。そして僕は機械部に居た關係上、明治四十五年二月に帝國調帶株式會社の専務取締役に選まれ約四ヶ年程も繼續して居たが、其中丁度歐洲の大戦が始まつたので、何か機械の販賣して見たいと考へ、先輩の庇護を受けて、微力ながらも此處に店を出し大

木村久壽彌太

正四年十月五日から、開業した様な有様です。

まだ創業して日も浅いので、お話する様な事もありませぬが、従来の關係上、三井、三菱等の人々と親しいので、僕の方へは比較的注文もあるし、又融通も利く様になり今では先づ前途の光明を認め得る位になりました。

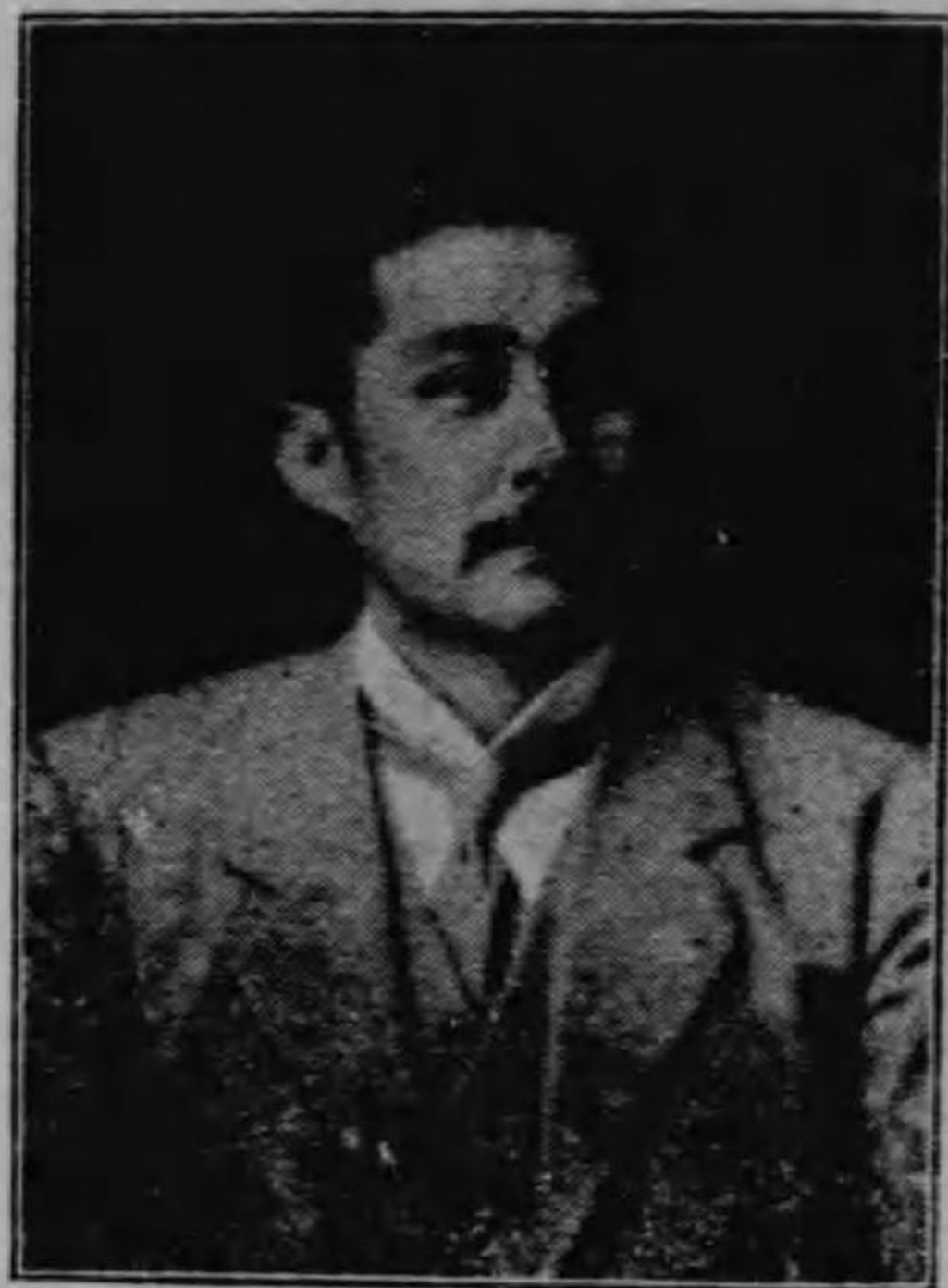
▲と、崎村商會はまだ羽翼が出来たばかりで、堂々たる門戸を張る域には達しないが、記者は君が獨力奮闘の意氣を愛すると共に、君の手腕により其前途の大に發展すべきを期待するのである。希くは君の將來に祝福の多からんことを。(芝區本芝三の一、電話芝六七一三)

三菱専務理事 木村久壽彌太

▲吳越相對し、漢楚天下の分つが如く、三菱と三井とは日本の財界に於ける二大王國である。既に對立せる王國である以上、世人は動もすると三菱と三井とは常に競争の立場にある。

るかの如く解釋してゐるが、夫は皮相の觀である。

▲といふものは三井と三菱の中心人物の性格が、餘りに變つて居て、殆ど想像の出来ない程も懸離れて居るからである。即ち三井の人々は、一萬圓の交際費を消つても、二萬圓の利益を増せば善いと云ふ主義であるが、三菱では、敢て二萬圓を儲ける必要はないから、至極堅實に活動して、世の非難を受けない様にし、そして五千圓でも一萬圓でも、道理に叶うた利益を作ると云ふのが本義らしい。新しい言葉で云ふなら、三井が米國式で、三菱は英國式であらう。



▲此處に於てか三井が本年の上半期に於て、千九百萬圓の純利益を納め、一ヶ年に四千萬圓を儲けるだらう

と財界の一口話にせられて居るにも拘らず、三菱は一體幾何を儲けたか誰も何とも言ふ者はない。假に儲けた總利益が一千万圓あるとした處で、三井の半額である。其の代り三井は損もする。然し三菱では損と云つても、炭礦の爆發位のもので、苟くも人爲的に起る損

木村久壽彌太

は殆んどない。所謂石橋を金棒で叩いて渡つて居るから墜落する事はないのである。

▲此處が所謂三井と三菱の異なる點である。而して三井が慈善病院とか貧民救濟會とか其他——新聞の三面記事になる様な處へは、進んで多くの金を投ずるが、三菱はそんな華なことはない。其の代り人の知らない様な處には盛んに寄附する。

▲評論文壇の大家横山健堂氏は其著「山水と人物」中に於て「三井三菱兩家の人物」と題したる文中に『今三菱では地方に澤山の土地を持つた大きな地主である。そしてその自分の土地の小作人の保護改善などには非常に力を盡して居る。然し此れは世間一般の人には餘り分らない。越後などでは、三菱の小作人取扱ひは殆ど模範になつて居る。が三井では斯う云ふ目立たぬ事は決してやらない』、又曰く『三井では人が來れば家來扱ひをする。岩崎では客扱ひをする』と、言つて居るが此れは頗る穿ち得た妙言であると思ふ。

▲て其の下に居る中心人物即ち幹部となる人でも、皆其の家風に添うて居る。無論兩家の家風は代々の中心人物に依つて組成せられて居るものであるから、當然の事ではあるが、三井男が葉巻を喫ふのに、岩崎男が常に朝日を喫ふを見ても明瞭な事實だ。此處に於てか

三井には早川とか朝吹とか、益田だとか波多野だとか團だとか又は山本條太郎、池田成彬とか才氣潑刺たる人物があるのに、三菱では之れに反し豊川とか串田とか莊田とか江口とか桐島とか莊清次郎、原田鎮治とかいふ犖實醇直な頑固者ばかりで、之を絢爛花の如き三井に比すれば色氣も艶もないものだが、是がまた三菱の特長として世間から推重さるゝ所以である。

▲木村君が江口、桐島氏等と共に三菱王國の一將星であることは今更言ふ迄もない。君の一門は宿毛の岩村家が俊才を揃へた如く、關西の財界に重きを置かれた田岡典章氏を兄とし、一代の熱血文學者として異彩ありし田岡嶺雲氏を弟とし、三人共に世に名を成したることは異數なりとせねばならぬ。

▲木村君は我社の同人杉指月兄と其郷里を同じふし、慶應元年城西旭村に生れ、十六歳にして大阪に上り、次で帝國大學に入り、其卒業したのは明治二十三年であつたが、爾來二十有八年間三菱家の重鎮として忠實に其職を守つてをるのである。

▲今や豊川氏は其表面の舞臺を立つたとはいへ、三菱に於ける土佐の俊才は雲の如く、營

木村久壽彌太

二二二

業部長としては江口定條氏あり、地所部長としては桐島像一氏あり、鑛山部長としては木村君あり、其他銀行部に川添清磨氏あり、神戸支店長として阪本正治氏あり、就中木村君は三菱家の譜代大名として其名最も現はるゝ一人である。

▲君は往訪の記者に語つて曰く、

世間では三井が儲けたから、三菱も大儲けをして居るだらうといふ者もある様だが、少しも儲けん事はないけれども、三菱は儲が少い事を告白する。元來組織の小さいものは一人二人の頭が自由に活動が出来るから機會は失はずに氣儘な働きが出来、而して大きな屋體でも、小さい様に一責任者の自由になつて居る處では大きな損もすれば、大きな利益も見られるだらう。併し三菱の様な組織では、此の様な時局でも、殆ど儲ける事は出来ない。此れは三菱のみならず、從來痛い経験を有する者と、體面を保つ必要のある者程、損をしてもやるので、如何しても儲からない。現に各官省など、約束をしてある品物でも、其後價格に變動があつて安くなれば引下げる事はあるが、高くなつても「マア〜三菱ともあらうものが!」と云はれると、種々の事情で、直破約をして、値段

木村久壽彌太

二二三

の改正をする事も出来ないの、見す〜損をして前契約を履行する事となる。之が主人自身のみでやる事なら如何でもなるし、中止しても差問へないだらうが、三菱の如きは如何しても其れが出来ない。故に損はしても利益がない、又餘りに要心するので、痛い経験を積んで居る者程好機を逸する。其れでも三井の様な、腕ツプシの揃うた處では破天荒の事も出来るが、三菱は到底駄目ですよ。

▲併し、今度支那が對獨塊宣戰と同時に、抑留した敵國船十四隻を張鷟等の手から三菱船舶部の方にチャーターする事となつたのを見れば、三菱とても萬更流星光底長蛇を逸する様な間拔けたことはしない。兎に角記者は郷黨出身の先輩として木村君の自重を祈り、且つます〜後進の誘掖に努められんことを切望して已まないのである。(牛込區辨天町七六、電話三二九〇)

土佐セメント株式会社
監査役、同東京支店長

吉川 滿次

▲白魚遅櫻、鷹阪城を横に睨んだ吸江灣の一角、轟々天を摩する拾數基の煙突に土佐の玄關口を飾れるは、言はずとも知る土佐セメント會社である。由來紙、輕節、珊瑚等を以て名産となすは昔のこと、近代土佐に於ける工業品として天下に誇るべきものは唯一のセメントあるのみである。されば此會社を以て土佐の代表的會社となすも強ち過言であるまい

▲曰く淺野、曰く小野田、曰く日本、曰く愛知、磐城など、數へ來れば日本のセメント界は今や群雄割據の状態にあるが、是等所謂列強の間に伍し、輒ち天下を三分乃至五分して其一を有てる土佐セメントが今日の盛運を致せる所以のもの、素より其製品の良好なるにも依るが、一方には其販路擴張の方法に於て頗る宜しきを得たるもの亦た其重なる原因として數へねばならぬ。此點に於て同社東京支店長たる吉川君の功勞は没却することが出来ない。

▲吉川君は香美郡山田町の産、舊姓を岡崎と稱し、後長するに及んで當時種崎町で有名な

吉川千之助氏の家を襲いて今日に至つたのである。そして幼年の頃より臼井鹿太郎氏の店鋪に入り回漕業及び珊瑚の取引に就て多年の修業を積んだもので、その一本立となつて門戸を開いたのは明治三十一年であつた。

▲日露戦役前後、土佐セメント合資會社が悲境に陥り、まさに解散せんとする迄に立至つ

吉川 滿次

たのを、君は斯業の前途に就て多大の望を囑し百方畫策の結果、宇田友四郎、臼井鹿太郎、川崎茂三郎、野村丑藏、中川治平、竹村與右衛門等の巨頭連と相計つ

て株式會社を組織して復活の運命を開いた。併し當時（四十一年頃）一般の恐慌につれてセメントも亦た市價の暴落を告げ、各社の競争猛烈なる間に、君は東京と土佐とを股にかけて極力奮闘し、四十三年には進んで東京に支店を設けて之を主宰し、この大競争の渦中に拔群の奇功を奏し、鐵道院は元より猪苗代桂川その他に得意を造り、同社製品の七割を東京に於て賣捌くまでの目覺ましい活躍を試み人をして其手腕の侮るべからざること驚嘆せしめた。

▲君は實に土佐セメントの爲に獻身的の努力をなしたのである。而かも君が努力の効終に空しからず、其後の景氣に一盛一衰はあつたが、今日では東京を中心とし名古屋以東の各地に跨がりて取引をなし、會社の製品中その約四割は君の手によりて捌かれつゝあるのである。君の功勞以て偉大なりとせねばならぬ。

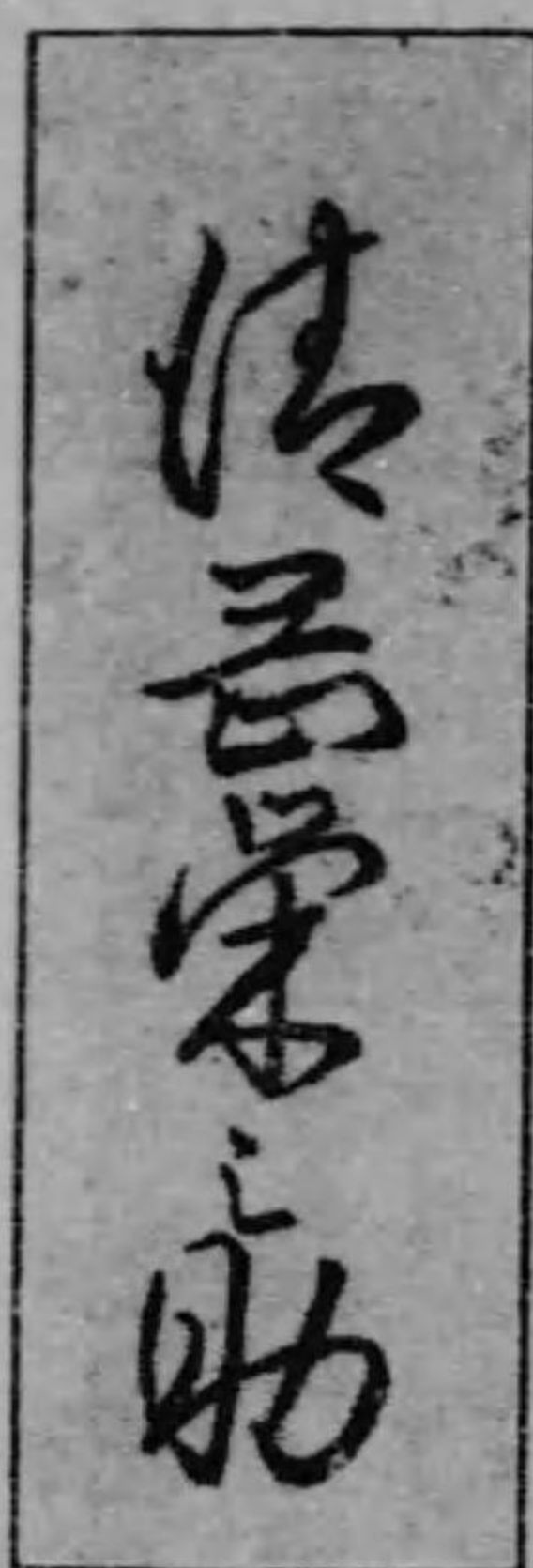
▲君の頭髮残すもの夫れ幾莖ぞ。その双鬢のピカ／＼と禿げ上りたるもの、輒ち君が奮闘の歴史を事實に語るものである。君は五十の坂にはまだ四五五年位はあるものゝ如く、而かも能く飲み能く語り、意氣軒昂當るべからざるものがあるから、君の今後の發展はその過去に幾倍なるものあるを疑はない、君乞ふ自愛せよ。(京橋區本材木町三の二六、電話京橋四五九)

隅田川精鐵所主 清岡榮之助

▲墨堤十里、待乳沈んで梢のり込む山谷堀を左手に眺め、三圍言問を過ぎて北すること約十町、右手の方に花の精靈を祭ると覺しき社殿は、これぞ彼の梁川尾巖が「一等の風光描

くに堪へず、白鬚の人は賽す白鬚の祠」と詠じたる其白鬚神社である。この社殿を南にして一基の煙突の常に黒煙を吐き、鐵板を叩く音、鐵棒を切る響、雑然として行人の耳朶を打つものは、輒ち隅田川精鐵所である。

▲月に花に此隅田川の景勝の地を占めて精鐵工場を經營せるは清岡榮之助君である。君は



高知市の人で明治十三年生れの本年三十八歳の男盛りである。其顔の輪廓圓くして土佐人の特色たる赭顔をなし、然も眉宇の間に閃くものは刻苦奮闘、鐵よりも堅き堅實豪邁の氣魄である。

▲一見する處、善く人の胸底を讀み、然も普通商人と異り、一種の權識を添へて人を畏怖せしむるものがあるのは、過去十數年來養ひ來たつた君が特性であらう。元來君は熱注性の人であつて、その活動力の強き事は何人も驚く程である。

▲故に朝は五時前後床を離れ、六時から六時半頃には晴雨に拘らず本所吉田町の自宅を出で、途中事業關係者の家を訪問し、遅くとも八時頃迄には精鐵所内の事務所に出勤するの

であつて、朔日十五日の休業日と雖も、殆ど休む事なく君一人は事務所に於て執務し、その奮闘振を發揮して居る。

▲斯の如き工場主の活動振りに依つて勇將の下に弱卒なく、多くの事務員職工人夫等は常に發奮する處あり、午前六時半既に出勤して執務中のものがあると共に、作業の開始せられて居る事は、殆ど他に比類を見ぬ處である。而して君は能く人を見て能く之を使ふに術長じ、各人の能力を遺憾なく發揮せしむべき手段を講じて居る。

▲殊に記者の最も感じたるは、此の工場が能率制度になつて居て、時間制度即ち日給制度を採つて居ない事である。今更改めて講釋する迄もなく昨今識者間に傳へらるゝ處の工場の缺點は、多く日給制度に起因するもので、この日給制度の缺點より同盟罷工の如きものが起るのである。然るに其の人の能力に應じ、其成績に準じたる賃金を支給する時は、決して此種の弊害はなくして充分なる効果を見ることが出来るのである。

▲隅田川精鐵所は前經營者時代は鐵管を製作して居たが、數年前君が之を買收し、其經營に移つてから主として鑄物を製作し、目下都下の鑄物工場としては隨一の地位を占めてを

る。なる程其構内に山積せられたる各種の屑鐵類を見ても、如何に多くの製産をなしつゝ、あるかを知る可く、また其の製品を眺めては、鐵葉鐵屑などの決して粗末にすべからざることをも肯れる。

▲今君が半生の奮闘談を聞くに君の幼時家道頗る振はずして充分なる修學の期を得なかつたので、ならば東京にて勉強し一廉の人物となる可く決心し、十五歳の時單身上京し暫らく親戚堀内壽太郎氏方に寄寓したが、間もなく堀内氏の嚴父が長逝したので、君は再び決心して獨立自營の途を辿らなければならぬ事となつた。而して其後君は幾多の辛慘を嘗め、長ずるに従つて兩三回、商業を營み可なり成功を収めたるも要するに當時十分の資本を有せない君は、君自身の満足をする丈に成功しなかつたのであるが、斯る間に君は本所吉田町なる某豪商の信用を得て、其の後援に依り遂に今日の成功を博するに至つたのである。

▲君が呱呱の聲を擧げたのは前にも言つた通り高知市であるが嚴父は安藝の田野である。田野の清岡といへば名だゝる名家で、彼の道之助、國之助等と同族であることは想像せらる

るのである。而して君は最後に記者の別れんとするに際し「私は未だ何等の仕事も出来て居ず、理想の十分の一にも達して居ませんから、如何か來年の此頃迄私を紹介する事文は待つて下さい。來年の此頃になれば多少私も物にならうと思つて居ますから……」と語り、多くを話さなかつたが、君の知人の傳ふる所によれば其資産既に數十萬圓に達してをるといへば君の成功の程度推して知るべきである。記者は榮之助の名にあやかりて君の事業のいや榮えに榮えんことを祈願して已まない。(府下寺島村堤外二八〇四、電話本所一六七五)

南米殖民
株式會社長
水野龍

▲珈琲實るアマゾン河畔、椰子茂るアンデス山下、南米の野は我が日本人の新故郷である男兒生れて徒に掌大の地に跼蹐たらんよりは、須らく萬里の波濤を開拓して海外に雄飛を試むべきである。殊に土佐は良い國、南を受けて薩摩嵐ならぬ水天鬚髯の彼方より太平洋の貿易風がソヨ／＼と吹いて一帆直ちに南米に向へるてはないか。



▲水野龍君は日本に於ける著名の南米通である。少壯郷里佐川を出て、或は官吏となり或は新聞記者となり或は又實業家となり曲折たる波瀾を経て、日露戦役の前後私かに感ずる處あり身を移民事業に委ね、殊に南米の移民に力を致し數次海を越えて實地の踏査探險をなし、一方には南米殖民株式會社を創立して年々移民を送ると共に、一方には伯刺西

爾政府の補助を得て東京にカフエーパウリスタを経営し、十年一日の如く海外發展の策に盡瘁してをるのである。高陵の地、曩には北米に歸化せる西原清東氏あり、今また水野君あり、共に聊が我が土佐人の爲に氣を吐くに足るものがある。

▲杜鵑血に啼いて梅雨煙の如き今日この頃、君を京橋區三十間堀の寓所に訪問すれば、君は欣んで記者を迎へ「僕は頗る不規則な經歷を辿つて來た人間で、是を話すと却つて青年の爲にならぬから、此機會に僕の平生の持論たる海外殖民に就て意見を述べてみよう」と語り出したるものは即ち是れ、

年々歳々六七十萬の割合を以て増加する我國の人口を如何に處分するかは刻下重要な國家問題である。是に就ては種々の意見もあるが、結局是を海外に送り出す外はないと信ずる。然らば毎年何人位出せば國內の調節が出来るかといふに、僕は其二割乃至三割五分即ち年々十五萬位の人を海外へ送れば適當だと信じてをる。

扱て其移民地は何處が良いかといふに、僕は多年の研究上南米地方が最も適當だと確信して疑はない。而して此十五萬の人を送るには一艘(一萬噸内外)千五百人宛乗るとして十五萬人て百艘の船を要する筈だが、今日では毎月一回即ち年十二艘の船すら出せない現状であるから、目下の場合人口の調節などは中々思ひも寄らない。

僕が南米移民に志したのは日露戰役當時で、其頃日本の歳出入は一億圓内外であつたが夫が僕の豫想に違はず戰爭後には五億圓以上に達し、而して貿易状態は始終輸入超過で年々多額の金額が海外に出るといふ状態になつた。是を救済して輸出入の調節を計るには移民を海外に送る外に適當な方法はないと信じたのである。

是を具體的に言ふと、我々日本人の生活費を最低度に計算しても年百圓を要するから、

移民一人が海外へ出ると其百圓が本國に残る事になる。夫から海外へ出て本國に送金する金額が一人年平均百圓以上になつてをるから、出入二百圓の利益がある。此二百圓を得るには年五分の金利として金貨四千圓の資本を要するから、詰り移民一人が四千圓を外國へ貸すと同じ理窟になる。左すれば千人て四百萬圓、一萬人て四千萬圓、十萬人て四億圓の貸金をしたことになる。尙ほ其上移民が増加すれば貿易率も随つて多くなるから、是で始めて輸出入の均衡がとれることになる。斯る見地の下に僕は十數年來この移民事業に身を委ねてをる次第である。

と、熱誠の氣眉宇の間に漂うて水野君は記者の爲め得意の持論を試みらるゝのである。

▲得意の南米移民論に水野君の眉は昂り肉は躍り、舌端迸り出づる所、頗る傾聴に値するものがある。曰く

我國でも歐洲戰亂の好影響を蒙つて今では正貨八億に達してをると狂喜してをるが、戦後歐洲列國が其消費したる幾千億萬圓の戦費を償うて國力の回復をするには目覺ましき活動をすると思はねばならぬ。夫には種々の畫策をするだらうが、就中戦禍の最も少き

南米地方に巨額の資本を下して其利益の吸収に努めることは火を賭るよりも明かであるから、我國でも決してウカ／＼出来ない。
 然るに我が歴代の内閣はこの移民といふ事に就て冷淡で、遠からず一億に達すべき人口を如何に處分するかに就て殆んど一定の方針の見るべきものがない。随つて僕等の事業も遅々として振はず、十四年間に僅か二萬の移民を取扱つたに過ぎないが、何と心細い話ではないか。

南米でも最も天産物に富むはブラジルである。此國は是迄獨逸の勢力範圍でリヨブランコダのムレールダの歴代の外相は皆親獨派の人であつたが、現外相ニロペラチャ氏は次期の大統領候補者に推されんとするロドリグエス、アルベスと改進黨の首領たるルイバルポ一サ兩氏の後援の下に就職した親米派の人である。若し來年の大統領改選にロ氏が當選し二氏が依然外相に留任するとせばブラジルは亞米利加の勢力範圍になるが、是は米國の外交政策が大成功を奏したものである。
 親米派の影には必ず排日の聲が伴うてをるから、この政局の變動は日本の爲に頗る不

利益な結果を來すことになるが、是を思ふと洵に寒心に堪へないものがある。兎に角斯る形勢の下にあるからは此際日本は疾風迅雷的に多數の移民をブラジルに送り、世界の富源を開發することに努めねばならぬ。
 恨むなくは大聲俚耳に入らず、僕が多年絶叫せる南米移民論は未だ國論を喚起するに至らず、政府の對外政策は兎角保守退嬰に失し、民間また此事業に就て顧みるもの少く、彼の米國の南米に於ける發展をば空しく指を咬へて見てをる現狀にあるは頗る遺憾の次第である。併し僕は決して初志を變せず今後一層努力し奮勵する積りである。

▲滔々説來り説去る水野君の意見は頗る肯綮を得たるもので、何人も省慮一番する所がなくてはならぬ。實に海外移民は日本帝國の國策であると共に、土佐の國策であらねばならぬ。今や人口の増殖、物價の騰貴に伴うて生活難の聲は七郡の山河に満ちてをるが、是を救済する唯一の道は海外の移住を除いて他に求むることが出来ない。徒らに猫額の山の畠を切開いたり、一錢二錢の利を争うて貧しき生活を營むより、寧ろ驥足を海外に伸ばし天の一方に新天地を開拓することが如何ばかり自己の運命を造るに得策か知れない。記者は

宮地久壽馬

縣下の青年が水野君の説を聞き大に覺醒する處あるを切望して己まないのである。(京橋區三十間堀三の一八、電話新橋一九一二)

陸軍歩兵大佐 第一師團參謀長 宮地久壽馬

▲幕末天下の風雲動搖するや、吾が土佐は武を以て薩長と共に覇を稱し、隨つて兵馬馳驅の間に一代の名を成したるもの少なくなかつたのである。曰く山地獨眼龍、曰く谷將軍、以下猛將頗る輩出したが、其後政論の勃興すると共に、多くの青年は悲歌慷慨、國事を談論する氣風養はるゝに至り、之に加ふるに軍人養成の機關であつた海南學校の教育方針が近來多少變つたため、かたゞ志を軍人——殊に陸軍に寄する者が少い傾向となつた。▲四時の功を成すものは去り、今や阪井、村木、楠瀬、藤本等の先輩は閑地に就き、尙ほ現役には由比光衛、安藤嚴水はじめ俊髦の士に乏しからざるも、其後繼者を物色するに至つては頗る心細く感ぜざるを得ないものがある。斯る人物寂寥の時に際し、新たに輩

の下なる第一師團參謀長の椅子に就いた宮地大佐を捉へ來つて、是を我が郷國の人士に紹介するは記者の頗る愉快を覺ゆる所である。

▲茲て先づ大佐の武官生活を紹介する。君は明治五年を以て市外大川淵に生れ、海南學校を経て陸軍士官學校を出たのが丁度日清戰爭の破裂した時であつた。ソコで少尉を以て彼

中流みよる 宮地生

の平壤攻撃を以て雷名を傳へた大島旅團に隨ひ各地に轉戦し、凱旋の後廣島第十一聯隊附となり、次で戶山學校教導大隊に轉じ、三十二年中尉

を以て陸軍大學校に入り、天保錢組の一人となつた。今更言ふ迄もなく大學校は陸軍の登龍門で、天保錢が胸間にぶら下らないものは到底青雲には達せられない。▲學校卒業後、廣島第四十一聯隊中隊長に任じ、間もなく參謀本部附となり、日露戰役に第四師團參謀として出征し、贅六聯隊を指揮して又々負けたかの汚名を回復せしめ、戦後朝鮮駐屯軍司令部に參謀となり、四十四年陸軍大學教官に轉じ、次で大正四年岐阜第六

宮地久壽馬

十八聯隊長に任ぜられ、本年八月拔擢されて現職に榮轉したといふのが、輒ち君の經歷の大略である。

▲この經歷によりても君の材幹が攻城野戦の器たるよりは、寧ろ謀を帷幄の内に廻らす參謀將校たる素質を備ふることを想望すべきである。素より馬上三軍を叱咤し、奮戦突撃、敵陣を屠る底の勇氣は武人として缺くべからざる所であるが、之に對して籌謀畫策、掌上に山河を按し、胸中に貔貅の進退を稽へ、輒ち勝を千里の外に決すべき技能は更により多く今日軍國の要求する所なりとせば、君の前途に一層の光明を認めざるを得ない。

▲今や秋高く馬肥え、機動演習まさに開始されんとし、之が計畫に頗る多忙を極むるの際君が特に寸暇を割いて記者を中澁谷の邸に引ひて會見の機を與へられたるは記者の感謝する所である。初對面の記者の目に映ずる君は一見沈毅豪放なる風概を備へ、しかも國同志の爽快なる辯舌と、其炯々たる眼光の閃めきの間に人をそらさぬ應接の妙あるとは、流石に好參謀官たる印象を残すこと深かつたのである。思ふに君が肩章幅廣の金線に變り、閣下階級に入るのもモウ遠いことでもあるまい。記者は本縣出身の最も多望なる將來を有す

る新進の武人として君の前途を祝福するの情に堪へないのである。(府下中澁谷三〇七、電話芝二六五〇)

株式會社 弘電社長 弘田國太郎

▲「見よ白き石炭は積れり」とは瑞西の一工業家が曾てアルプスの積雪に對して發したる讚美の聲である。實に火力に代る水力の利用は電氣事業に異常の發展を促し、我國に於ける各種の事業中激甚なる増加率を以て進歩發達したるもの電氣事業の右に出づるものはなく現に本年八月末現在の調査によれば斯業に投ぜられたる資金六億七千萬圓と註せらるゝのである。

▲斯かる前途の趨勢を達觀して夙に身を電業に委ねたる弘田君は中島平太郎氏と共に東京に於ける本縣出身の二大明星である。君は明治五年を以て月の名所の桂濱を横に睨んだ長濱村に生れ、幼にして家を擧げて小高坂西町に轉じ、暫く海南學校に學んだが、明治二十

三年、志を立て、東京に上り、多年の宿志たる電氣業を研究するため郵便電信學校に入り之を卒業して、愈世に出づることになつた。

▲電業家としての振出しは遞信省で、當時勃興の氣運に向つた電話架設工事及び電信の事業に獻身的の奮闘をなしたが、日露戦役後民業の發達する趨勢に鑑み職を辭し、東京電燈會社に聘せられて技師となり、工事の設計監督に其手腕を揮つて其技術の侮るべからざる事を示した。



▲此時君の先輩友人は其手腕を認めて成功の疑なきを説き、切に獨立して土木建築及び電氣器具の製作取附等々の事業を開始すべきを奨むること切なるより、君の意終に動き、明治四十三年を以て弘電社を創立して頂天立地、自由に活動する地步を造つたのである。

▲斯の如く口では聲援を與ふる者があつても、物質の補助をなすものは無いので、君は信用を以て唯一の資本となし、たゞ誠實、たゞ勤勉、たゞ熱心、この主義の下に極力奮闘する。居る。

▲君の手に依りて完成せられたる事業は枚擧に遑ないが、今其一斑を示すに日英水電、天龍川水電、遠參電氣、秋葉水電、揖斐川電力、帝國電燈、安房電燈、水澤電燈、小名濱電燈等は其重なるものにて、獨り内地のみならず、今や弘電社の事業は支那方面に發展し、既に漢口の電話架設工事を完成し、目下武昌を中心とする電話工事に着手し、尙ほ富士製紙工場用の電話線(六十五哩)も其工事中に屬するのである。

▲前にも言へる如く君は人に對して誠實なると共に、また事業に對しても誠實である。左れば君の請負たる工事は各會社より非常の賞讃を博し隨つて感謝狀を贈られたるもの十數通の多きに及んでをるが、今其一例として安房電燈株式會社より贈られたるもの左に紹介せんと欲するのである。

本社電氣工事施行に際し外線引込工事一切を貴社に囑託せし處、貴社は其試験を遵守し

孜孜其業に従事し、期を誤らずして完成を告げたるのみならず、竣成後間もなく近年稀なる暴風雨に際會せしも、線路に些る被害なく爲に本社は豫定の如く營業を開始するを得たるは貴社の勞を多とするに足る。茲に貴社の克く職責を盡し又工事施設の丁寧眞摯なるを表彰し併せて其勞を慰するため金杯を贈呈す。

一事は即ち萬事である、以て弘電社の事業の内容を知るに足るのである。

▲君は斯業に對する學識經驗ともに之を有するのみならず、爾來理性に富むと共に同情心厚く、加かも先輩に對する禮讓頗る厚きを以て、先輩また能く君に聲援を與へ、諸方に紹介するを辭せざるより、君の事業は年一年に發展し、最早牢として抜くべからざる地步を占むるに至つたのである。記者は君の前途を祝福して其事業が百尺竿頭更に一步を進むるの境に達せんことを祈るのである。(弘電社京橋區采女町二一、電話新橋一九二五、三五八〇)▲住宅府下荏原郡上大崎村四四四、電話芝三三八〇)

畫 伯 廣 瀨 東 畝

『心だに空しくもたば吳竹の、うさふしげき世をばかこたじ』とは、田中青山伯が同郷の畫家廣瀨東畝君の畫竹に題して、彼の紛々たる毀譽褒貶の外に超然たる曠朗洒脫の懷を述べたるものである。この廣瀨君の畫竹によりて想ひ起すは、曾て蘇東坡が文與可の筆を讚嘆して『與可竹を畫く時、竹を見て人を見ず……』と詠誦し、また久阪玄瑞が武市瑞山に贈りて、『別時何ぞ必ずしも平生を説かん、竹を畫いて吾に贈る無限の情……』と朗吟したる其風概である。實に一管の彩筆に人の情趣を動かし感興を唆る丹青の力もまた偉大なりとせねばならぬ。

▲記者の蛇足を添へるまでもなく、廣瀨君は東京に於ける土佐出身の畫家としては鐵中の錚々たるものである。豈に管に土佐の畫家たるのみならんや、廣瀨君はモウ立派な檜舞臺の千兩役者で、殊に花鳥を以てせば幾んど其壘を磨するものなりと謂ふも決して過賞の言てなす。

▲廣瀬君は斯道の巨匠荒木寛畝の門を出たもので、其畫風は南北兩派の長を採りて渾然融合し、其清艶なる筆致、幽邃なる畫趣、墨痕躍動して神韻自ら生じ靈妙の技到底他の模倣を許さず、正に當代獨歩と稱すべしである。

▲廣瀬君が郷里佐川を出て寛畝の門に入つたのは明治三十一年、二十四歳の時である。壁



「深山之秋」を孰れも六曲屏風に揮毫して出品して悉く入選の譽を得、近くはまた本年の文展にも「霜おく頃」が見事に入選し其間宮内省及び皇后職の御買上の榮を負ふこと前後十五回、美術協會の褒賞を受くること二十餘回に達せりといふに就いても其妙手の程を知ら

の如き其天稟の技は此巨匠の琢磨に依りて嶄然光彩を發揮し、三十二年始めて日本美術協會に出品したる秋野雉子の圖は直ちに褒狀を受け、爾來文部省美術展覽會には毎會出品し、即ち第五回には「よぶかたの圖」第六回には「谷間の雪」、第七回には「逸氣横生」、第八回には「燒ヶ嶽眞景」、第九回には「新霜」、第十回には

るゝのである。

▲殊に一昨年来國桑港萬國博覽會に「春雨」の圖を出品して名譽賞を授けられ、昨春美術協會に於ては御前揮毫の榮を辱なふせしなど、畫人としての名譽無上とすべきである先是君が明治三十五年東京高等工業學校教授に任せられて圖案科を擔任し大正三年に至る迄十餘年間藏前に教鞭を執つたことも君の經歷を飾るべきものである。

▲君不惑の齡を越ゆること僅かに三歳、其前途春秋に富める身を以て更に一段の工夫を積まば其造詣知るべしである。昔者君の師寛畝は土佐藩の繪頭となりて終に大家の名を成すに至つたが、君も亦他日繪頭ならぬ日本畫家の巨擘となりて雷名を天下に博するに至らんこと期して待つべきである。君乞ふ自愛せよ。(下谷區上野櫻木町三四、電話下谷三八〇二)

塑像家 本山白雲

▲土佐には著名の政治家もある、實業家もある、陸海軍人、學者、文學者と大抵の社會に於てひけを取らぬだけの人物が揃つて居るが、恨むらくは美術家——殊に彫鏤の技術に富む名手に缺けてをる。たゞ是であるは山本白雲君にして、即ち本山君は土佐の左甚五郎である。

▲山本君は嘗に土佐出身の彫刻家としての第一人者たるのみならず、東京に於ける斯道の達人として名聲噴々たるものである。素より君の先輩株として高村光雲だの岡崎雪聲だのと云ふ顔觸は廣く世間に知られて居るが、是等の連中はモウ老境に入つてをるから今後の塑像界を脊負つて起つべきものは輒ち山本君等の新進者流である。

▲妙技神に入る本山君の腕前は如何に帝都の地に花を咲かしてをるか。試みに記者の知れる所を數ふるも芝公園に對立せる後藤板垣兩伯の銅像、九段社頭に聳ゆる品川彌次郎の銅像、東京驛の玄關に飾れる井上子爵の銅像、日比谷の十字路に人目を惹く川路大警視の銅像、

像、其他西郷元帥、東郷元帥、澁澤榮一、兩宮敬次郎、川村海軍大將、辻新次、佛國公使アルマン、高島嘉右衛門、藤岡市助等の銅像いづれも其模型は君に依りて造られたるものである。



▲更に之を地方に就て見るに鷹阪城下藤並祠頭に神采奕々たる我藩祖一豊公の銅像は言ふ迄もなく、遠く北海道の彼方札幌公園に雲を突く永山中將の銅像、扱は大阪實業界の雄鎮たりし松本重次郎我郷の先輩片岡健吉、林有造、小野義真、川崎幾三郎等の銅像また君の靈腕に成りしことを知らば其造詣また知る可しである。

▲更に君の技能を卜すべきは明治二十七年君が東京美術學校を卒業する際、其實技に於て百點といふ破天荒の成績を收めたことや、また三十二年同校の懸賞競技に應じ佛國人アリヴェエの胸像を製作して最優等にて當選したることや、更に三十八年海軍省の懸賞競技に應じ第一等の當選者となりて西郷從道、川村純義

兩 大將の銅像原型を製作したること抔また以て其天才の閃きを見ることが出来るのである。

▲二人とあつて二人となき、此土佐出身の美術家は幡多郡宿毛の産である。由來宿毛は人物の淵藪で岩村家三人の兄弟をはじめ小野義真、小野梓、竹内綱、大江卓などの先輩が出てをるが更に文藝家としては洋畫の岩村透、小説の田村松魚がある。是に白雪君を加へて宿毛に於ける藝術家の三天才と稱すべしである。

▲更に驚く可きは君が彫刻の技に長ずると共に其詞藻の頗る富麗なることである。記者は曾て「古谿莊の一夜」と題し君が岩淵なる田中青山伯を訪問したる一篇の文章を讀んだことがあるが、其行文の雄麗典雅なる實に黒人をして跣足で逃さすものがあるのに敬服した。若し君の手より刀を奪ひ之に代らしむるに筆を以てするも、確かに文壇一方の雄として闊歩するに足るものがあると信ずるのである。

▲玉磨かざれば光なしの文句は頗る古いが、君が半生の歴史に於ては是が頗る新しい意義を以て居る、如何に天才なればとて是に琢磨の効が加はらなかつたら本山辰吉君は今頃せ

いゝ宿毛の町長、小學校の校長位のものであらう。

▲君の歴史は實に惡戰苦闘の夫である。明治四年君が呱呱の聲を擧げた時は家道頗る衰へ殊に嚴君は酒に親しんで幾んど産を治めざるより、母堂一人の丹精に依りて漸く君は成長したのである。

▲之を聞く君が産聲を擧げた時、母堂は生計の資に窮して如何ともするに由なきより、當時その親戚にして縣の大參事たりし林有造氏に泣き附かんものと、乳呑兒を脊負ひ三十幾里の道を六日費して漸く城下に來り林氏の玄關に立つた時、書生は之を乞食と思ひ追拂はんとせしを、林氏奥より出て來り「オ、お曾江さんか能く來た……」とて厚遇され歸りは駕で宿毛に送られしと。白雪君は幼時母堂に苦勞をかけしことを思ひ出しては今でも眼に露を宿すのである。

▲貧苦の中に漸く小學校を卒業し、燃ゆるが如き上京の念を押へ暫し町の鼻垂小僧を相手に教師をして居たが、十八歳の時(明治二十一年)意馬心猿抑へ難く竊に家を脱して大阪に上り、更に四圓足らずの旅費を才覺して東海道を膝栗毛にてぶつ通し、東京に來り舊藩

主伊賀氏の庇護に依りて高村光雲氏の門に入り始めて彫刻の技を學び、明治二十三年更に岩村通俊氏の援助をも得て東京美術學校に入り、苦學三年にして前に言へる如く最優等の成績を以て卒業の榮を荷ひ始めて一本立の人間となつたのである。

▲斯く書いて見れば何でもない様だが、此間氏が貧困と戦ひまた母堂に對する恩愛の情に迷ひ時に苦悶し時に奮勵刻苦した其歴史は實に人をして感泣せしむるものがある。

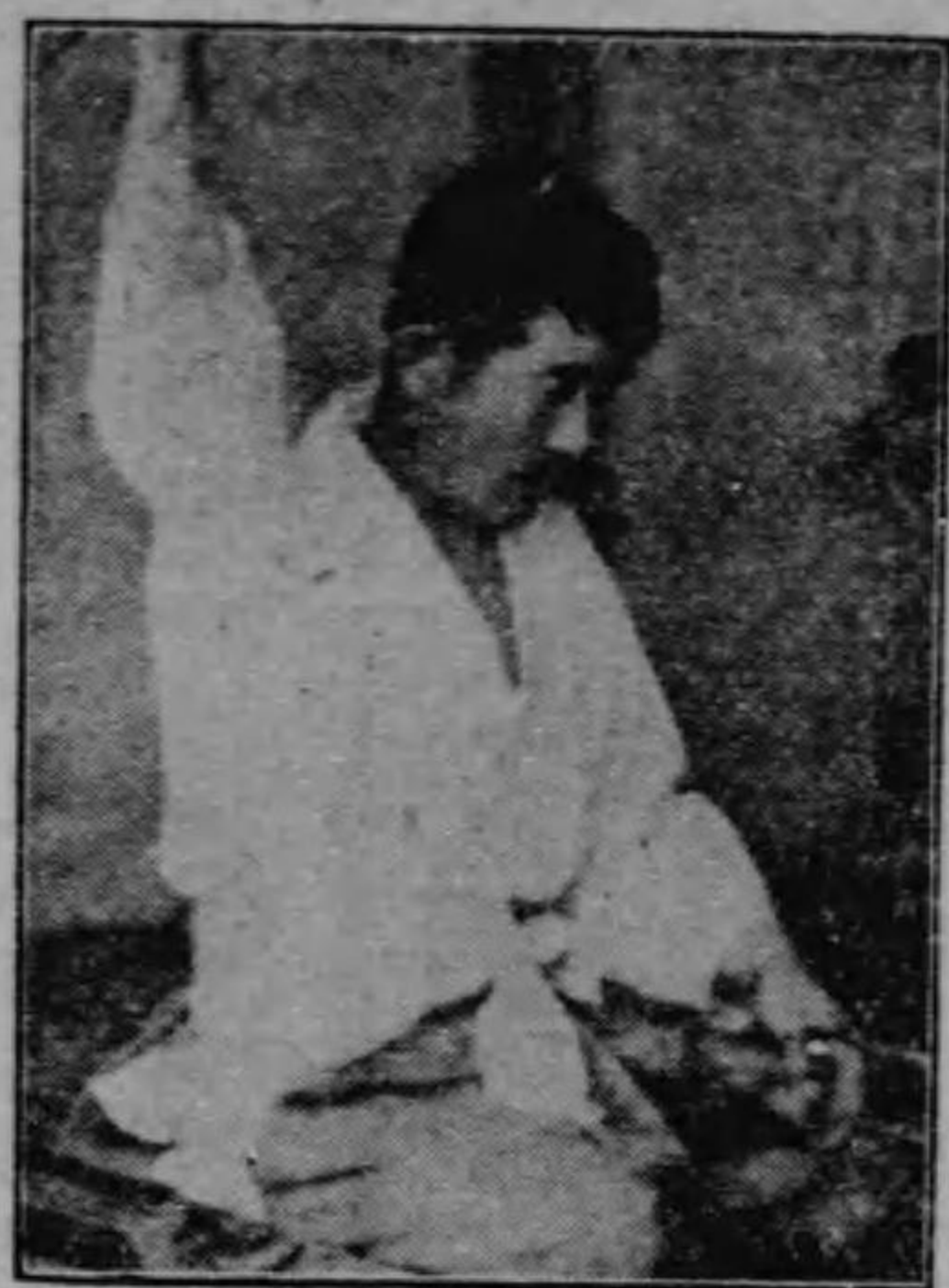
▲卒業後高村氏の推薦により直に母校の教授に任命されたが、當時東京に於て銅像といへば上野の西郷、九段の大村等僅々指を屈する許りなりしより、君は奮然志を立て古今偉人の像を製作するに決し、先づ平生崇拜する阪本龍馬の像を作り、次いで山地中將に及んだが、其内に澁澤男は君の技能の卓絶せるにほれ込み月々資を給して其事業を助け、岩崎家また君の爲に多大の援助を與へ、更に井上角五郎氏が君の才を愛して庇護されたので、其推薦周旋に依りて君の技術は次第に世間に認められ、終に今日に於ては斯道の大家として噴々たる名聲を博し、隨つて君の門戸頗る榮え、今は七十六歳になる母堂にも安樂に餘生を送らしめ一家の清福頗る羨むべきものがある。

▲斯の如く艱難は君をして玉たらしめたのである。されど趙氏連城の壁これを以て天下に傳へんには今後一層の努力を要すること勿論で、君自身また決して今日の成功を以て満足するものに非ざることを信するのである。記者は君の名が大正の運慶湛慶として日本の美術史に特筆大書せらるゝ日を期待して已まないのである。(小石川區大原町一九、電話小石川八七八)

宮内省刀劍師 森岡正吉

▲『日出の國に名實あり、百鍊の精鐵鍛造する所、光芒電閃夏猶ほ寒し、風は蕭々として髮冠を衝く、請ふ見よ日出男兒の膽……』と謳はるゝ如く、刀は大和魂の表徴である。秋水腰間に横はる所、そこに士人の節義があり氣魄があつたが、恨む可し廢刀の令一たび出て、正宗、村正が榮切庖丁の代用を勤むることゝなると共に、人に廉恥なく道義頽廢、地を拂つて空しくなつたのである。

▲若し此趨勢が今日まで續いて居たら、千古傳來の日本の名刀は鏽朽ち、また外國へ出てしまつて其跡を絶つたかも知れないが、それが今日まで其命脈を保ち刀劍に關する技術が保護されて居るのは、一に田中光顯伯の力に歸せねばならぬ。即ち伯は明治二十三年頃斯道の衰退を憂へ、自ら卒先して刀劍會を設立し、一方には宮中より年々一千圓宛の御下賜



を仰ぐと共に、また一方には岩崎彌之助氏を説いて出資せしめ、爾來その會の保護の下に刀工は元より、研師、鞘師等の養成に勉めたものである。而して我が南海太郎森岡正吉君は田中伯の援護の下に、また刀劍會の補助の下に日本有数の刀工として名聲を發揮したる一人である。

▲元來土佐と刀劍とは深い因縁がある、前に言つた田中伯の没すべからざる刀劍保護の功勞は無論として、其の鑑定家として日本の第一人者ともいふべき今村長賀氏あり、別役成義氏また今村氏に次いで著名であつたが、今また技術者として森岡君を土佐から出したこ

とは、ます／＼其因縁の深さを思はざるを得ないのである。

▲名譽ある日本の刀工師たる森岡君は明治八年高岡郡佐川町に呱呱の聲を擧げた人である。家は代々鍛冶を以て稼業とし、殊に君の嚴父は刃物鍛冶として獨特の技術を持つてゐたので、君も習ふより慣れよて幼少の時から斯道の趣味を有つてゐたのである。漸く長じて徴兵適齡に達するや、時恰かも日清戰役に際して滿洲の地に出征し、續いて日露戰役にも召集されたが、嘗て職業の爲に火傷をしてをつた爲め、出征して旅順の丸弾となる機會に遭遇することが出来なかつた。

▲此時に於て君は其郷友の多くが續々名譽の戰死を遂ぐることを耳にし、自分が奉公の道は其好きな刀劍鍛冶の技術を磨き上げて、國家の爲に名刀を製作するにありと信じ、雄心勃勃々禁ずる能はず、ソコて其旨を同郷の先輩にして當時宮相の地位にありし田中伯に通じて訴ふる所ありしに、時恰も伯は刀劍會を設立し斯道の誘掖に力めつゝあつた際として、快よく君の願を容れらるゝことゝなつた。

▲茲に於て君は東京に出て、先づ宮本包則氏に就て刀工の技を修めんとせしが、故ありて

大阪に下り、一代の名工たる月山貞一氏の門に入り刀劍會の第一期生として熱心に技術を研究し、刻苦三年の後、業を卒へて四十一年再び上京し、爾來宮内省の官邸に住ひ、別に刀劍會は君の爲に工場を小石川區氷川町に設け其天縱の技能を發揮せしむることゝしたので、其靈腕は年と共に練磨されて、今日に於ては刀劍師としては日本に於て君の右に出づるもの稀なりといふ迄の造詣に達したのである。

▲君は往訪の記者に語つて曰く、

私が今日あるは畢竟田中伯爵の賜であります。何しろ二貫目餘の鐵を鍛つて僅か二百目内外のものに拵へるので、なか／＼容易の業ではありません。殊に明治神宮に獻納する刀には随分苦辛をしました。今度私の弟子が一人卒業しましたし、それに研師と鞆師も刀劍會の世話で卒業しましたから、是等の人々と一緒になつて此十月から打はじめて一刀を造り、今上陛下に獻上する積りです、其時は齋戒沐浴して狩衣烏帽子を着け工場には七五三を張り宮内省監督の下に満心の精神をこめて製作しようと思つてゐます。と、實に刀は人の魂の權化である。志操高潔、肚裏一點の曇りなき森岡君その人の如きを

以てして、始めて稀代の名刀は造り得らるゝのである。

▲君の性格を知るべき一例として見るべきは、記者が君を小石川戸崎町の寓居に訪問した其日は丁度同町の祭禮であつたが、その町には今まで神輿が無いといふので町内の若い者などが頗る情れてをるのを聞き、君はあまり裕ならざる財布より早速五十圓の金を取出して渡したので、町の者は大に喜び早速日本橋の傳馬町へ駆けつけ立派な神輿を買つて來て今年は始めて賑やかな祭りが出來て他の町に對して肩身が廣くなつたとワツシヨイ／＼の聲勇ましく其神輿を擔ぎまはる狀を記者は親しく目撃して、斯る性格ありてこそ始めて名工の妙技神に入るものあるべしと感嘆の念を禁じあへなかつた。

▲是につけても更に感嘆すべきは田中青山伯が土陽美術會の保護に、刀劍會の設立に、日本漆工會の指導に或は審美書院の庇護に或は土佐維新勤王史、櫻田義舉録等の發行に力を美術學藝の奨勵に盡すと共に、後進の誘掖に努めらるゝ其うるはしき精神である。佐川が夙に人物の淵叢となり世界有数の植物學者として牧野富太郎氏を出し、新進の畫家として廣瀬東畝氏を出し、今また大正の正宗たる森岡正吉氏を出すに至りたるもの畢竟伯の誘掖

に負ふものなりと言はねばならぬ。然り森岡君の人生意氣に感ずるの念まさに『君が爲に鑄作す百練の刀、要らく長鯨を斬ること萬段なるべし』との情を青山伯に附與せんと欲するものがあるだらう。干將莫邪そも何ぞ、君の手腕と抱負に信賴して記者は其大成を期待するのである。(小石川區戸崎町十二)

醫學士 森田正馬

▲『向ひ通るは清十郎じやないか、笠がよく似た菅笠が、能く似た笠が、笠が能く似た管笠がえ』に袖をしぼる歌比丘尼の念佛。扱ては『都をば霞と共に立出て、しばし程ふる秋風のおと白河の關路より又立ち歸る旅衣、浦山すぎて美濃國上野の里』に哀れを留めたる斑女の扇など人の性情の常を失うて狂ひ廻る様は誠に傷はしき限りである。

▲六百六號だのツベルクンリだのと近代醫術の進歩に伴うて新薬は頻々發明され、大概の病氣は癒ることになつたが、神經機能の疾患に對する研究は未だ十分でない。やれヒステ

リーだ、やれヒポコンデリーだ、やれ神經衰弱だと近來此種の患若がなか／＼多い。御醫者さんでも有馬の湯でも精神病は容易に治療の目的が達せられない。



▲この特殊の病氣に對し熱心なる研究をなす本縣出身の醫學士に森田正馬君がある。森田君は斯ういふ篤學の人だけあつて君自身の語る如く多少變屈人と言はるゝ方である。變屈人だけあつて其思想も識見も世の凡庸の徒と選を異にして、頗る出色の觀がある。詰り異彩ある杏林の材である。

▲往訪の記者に對し君は自己の經歷性行を語つて曰く僕の生れは香美郡富家村で、學校は一中であつたが三年生の時親の羈絆を脱し獨立して勉強したいものと、國を飛出して東京へ來たが、僅か三月許りすると脚氣に罹り、仕方なく國に歸り一中に復校し、夫から熊本の高等學校を経て東京の帝大を出たのが明治三十五年であつた。書生の時代から僕は死にかまんの流義で、或時は仙人になりたいと思ひ、又或時は君子

になりたいたとも思ひ、而して理想より實行に重きを置く主義であつたが、父の希望に従つてトウ／＼醫科を遺ることになつたものだ。

遣り出して見れば頗る趣味が出来殊に精神病者を取扱ふことが一番愉快だと感じ、終に此方面に身を獻ぐることゝなつた。僕は小供の時から頗る變屈で随分亂暴もしたが、常に宗教的信念を持つて居た爲め、幸ひ墮落することもなく無事に目的の學科を修むることが出来た。

▲と、君自身の談話にても窺ひ知らるゝが如く、君は意志の堅實なるに加ふるに、思想また時代を超越し眞に學者的態度を失はぬ紳士の一人である。斯くて君は大學を出るや多年集鴨病院に入りて研鑽を積み、今は根岸病院に顧問たる傍ら慈惠醫學專門學校、女子體操音樂學校等に教鞭を執り、又た自宅に於ても患者の診察に應じ、今は精神病の篤學者として都下に錚々の名聲を發揮して居る。

▲昔者物の本(太平記)に『諸病は氣より起ることにて候へば氣を收むる藥には愈山人が降氣湯、神仙沈麝圓を合せて參り候ふべしと申す』とあるも、それは今時に通用せぬこと。

若し神經に異状ある者は須らく東京に來つて森田君に診察をして貰ふべし、といつても一文の廣告料をもらつた譯にあらず、森田君それ自身の造詣に對し記者は敬意を表すのあまりてこの提灯持を辭さないのである。(本郷區駒込蓬萊町六五、電話下谷七二〇三)

株式商店主 森澤金之助

▲東京に於ける土佐人を紹介すること既に五十有餘名に及んだが、其活動せる舞臺のあらゆる方面に亘つてをることを了解するゝであらう。しかも未だ一人の株式界に飛躍せる者に及ばないのは、畢竟土佐人にして兜町に鎗先の功名をなし、又た現に奮闘を試みつゝある者の極めて稀なるからである。其間にあつてたゞ一人新たに株式商店を開いて華々しく活動を始めた者に森澤金之助君があるから、今この篇を終るに際し同君を紹介することとする。

▲土佐でも此頃株式熱が非常に高まつて來た、が由來株券の賣買を以て投機の業と見做す

は時代後れの思想であつて、成程定期とか直の取引に手を出せば、ハルカッルか危険極まるものであるけれど、若し現物の賣買を巧みに行へば資金を安全に且つ有利に増殖するの道これにましたることはない。殊に記者が此文を草する十月下旬の如き總ての株式は急轉直



下して暴落の勢を示してあつたが此頃の相場を以て各會社の利益配當に對比して採算すれば、今日は實に現物の買人に絶好の機會である。

▲とはいふものゝ、今日現物なり定期なりの取引を委託しようと思つても、東京でも大阪でも確實な店が少くないのに困る。新聞には確實に取引して客の便利を計るなど廣告して人々の投資熱を唆してをるけれど、其多くは事情に通ぜざる地方の客の證據金を呑んだり、賣買共に頭を刎ねたりして正直に營業をして居るのは稀だから取引には餘程店を選ばなければならぬ。斯る際に於て森澤商店の如きは其同縣人たる好よりするも亦た店主自身の人格經歷よりするも、最も安心して賣買を委託するに足るものなりと保證

し得るのである。

▲森澤君は明治九年土佐郡布師田村に生れ、夙に高知共立學校を卒業し、明治廿六年上京した。當時君の志す所は外交官か、然らずんば基督教の牧師たらんにあつて、この目的を遂行するため國民英語學校其他に於て修業する所があつたが、家道振はずして學資の續かざるため、一旦歸國して當時高知市に移轉して米屋を營める家業を助けて努力する所があつたが、鬱勃する向上の念禁ずる能はず、再び上京し先輩の勸告と推舉に依り初志を離へして岩崎家に入ることとなつた。時は明治三十四年である。

▲爾來君は忠實に岩崎家の爲に盡す所があつた、随つて久彌氏の君を愛すること子の如くその水魚の交實に掬すべきものがあつた。元來岩崎といへば言ふ迄もなく日本一の富豪で、どんな贅澤でも出来るのであるが、久彌氏自身から其身を持すること頗る質素端正にして、且つ主従の間に懸隔を置かず、其家風の極めて平民的なることは當世の富豪中稀に見る所である。而してその一家總て土佐言葉を用ひ、輒ち上野の森を一目に見渡す湯島の一角には土佐の別天地が開かれてあるが、斯る別世界に君は十七年といふ長き月日を送つ

て一意専心、忠勤を抽んでたのである。これにつけても記者は君の堅忍持久、其操守の念の篤きに敬意を表せざるを得ない。

▲既に別天地である。所謂現代の風潮に多く接觸せざる君は通常なら餘程時代後れの人間となる筈であるが、根が素養あり且つ覇氣に富めることとして、常に時代の趨向を洞察することを怠らず、今春多大の恩賞を得て岩崎家を辭すると共に新たに開拓すべき運命につき君は熟慮講究した結果、株式界に飛躍を試むべく、輒ち本年四月日本橋區南茅場町に獨立して商店を開いたのである。

▲土佐人として東京に株式商店を開いてをるのは恐らく君一人であらう。而して君の商店は開業日尙ほ淺しと雖も、岩崎家の關係筋に得意の多いのと、君が淡泊にして且つ義氣に富める性格とは一般の信用と人氣とを博し、其營業の日に繁榮を極むる他の同業者をして顔色なからしむるものがある、記者は森澤君の事業のます／＼發展せんことを祝福して、茲に筆を擱く。(住宅本郷湯島天神町一の一〇三、電話下谷三三八二)

大正六年十二月十七日印刷
大正六年十二月二十日發行

(定價金一圓三十錢)

良國良人

不許複製

著者

澤 翠 峰

發行者

尾崎 卓爾

印刷者

高橋 治一

發行所

東京市赤坂區青山南町四丁目三番地

青山書院

(電話芝一七五八番)

印刷所 東京市神田區宮本町 正中社

376
49

終